

# 「大腸がんの芽を摘む」名医

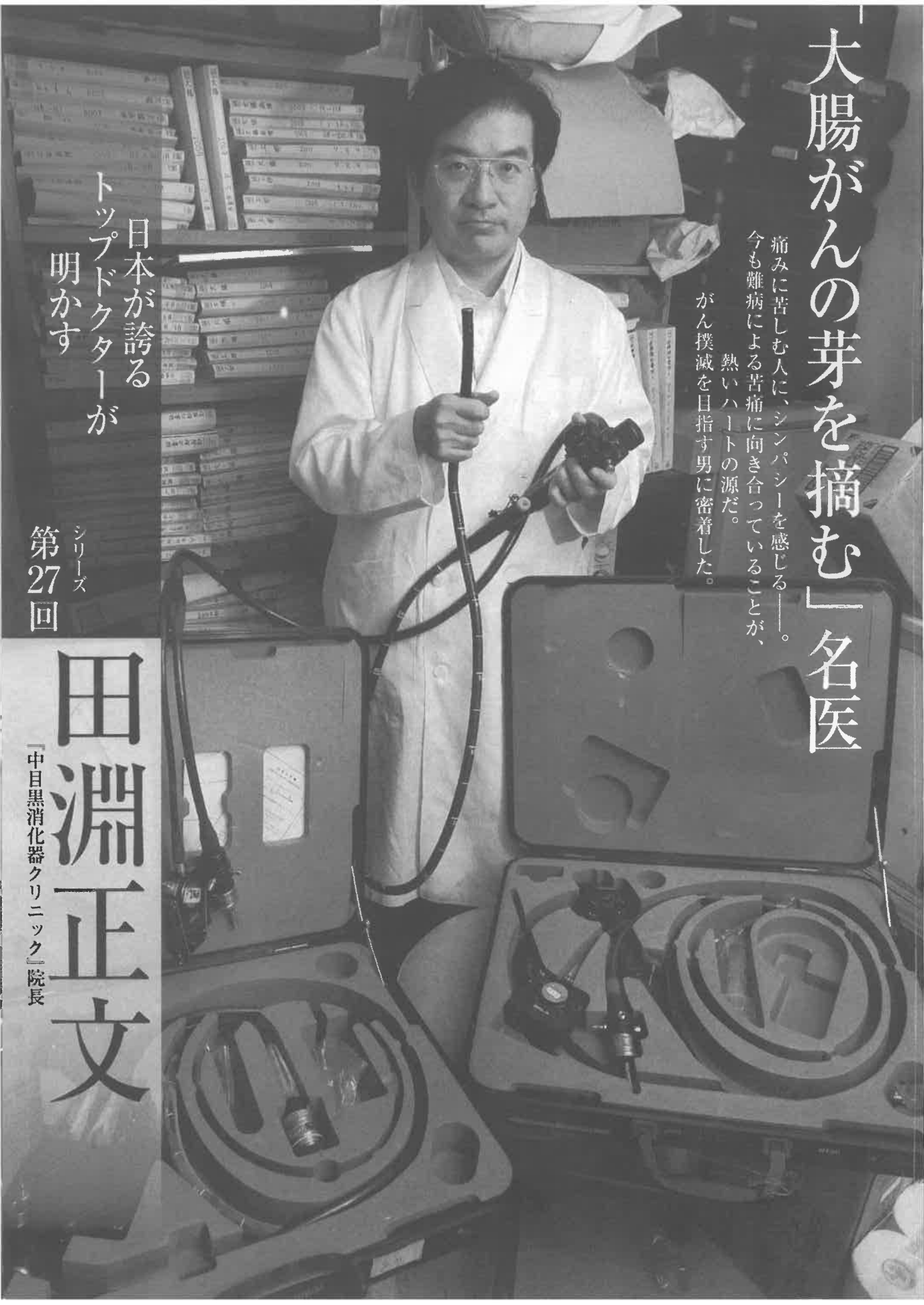
痛みに苦しむ人に、シンパシーを感じる――。  
今も難病による苦痛に向き合っていることが、  
熱いハートの源だ。  
がん撲滅を目指す男に密着した。

日本が誇る  
トップドクターが  
明かす

シリーズ  
第27回

## 田淵正文

「中目黒消化器クリニック」院長



## 「前がん病変」を 世界で初めて発見

夜1時を過ぎても、明かりが消えない。拡大内視鏡を世界で初めて臨床応用した名医・田淵正文医師（57歳）が院長をつとめる『中目黒消化器クリニック』は、都内の住宅街にある。この夜も、診療を待つ患者で埋まっていた。

田淵医師は、内視鏡を巧みに操り、肛門からスルスルとS状結腸を潜り抜け、大腸の先にある小腸に到達させた。腸壁を観察し、病変があれば切除することを繰り返す。

「ああ、ありましたね。がんになる前のポリープです」  
モニター画面いっぱいに出されたのは、直径わずか1mmの平べったい病変。周囲の組織と比べ、模様が不規則に乱れているのが、前がん病変の証しだ。専用の器具で病変を摘み取るのに1分たらず。約30分の手術で計3個の「がんの芽」が摘み取られた。  
切除された「直径1mmの病変」の正式名称は「平坦陥凹型大腸腫瘍」。1989年に世界で初めて田淵医師が発見

手術室は決して広くはないが、医師の腕前は指折り。政府の高官なども、たびたび定期検診に訪れる



▲中央部分が大腸の「前がん病変」。規則正しい形状で並ぶ周囲の細胞に比べ、ピットパターン（表面の模様）が明らかに乱れている。隆起型ポリープの5倍の速さで成長する危険な病変だ

クリニックの待合室に掲げられた保険医認定証（上）と宮内庁からの振込通知書（下）



した「前がん病変」だ。この発見で、進行大腸がんの45%を占める平坦陥凹型由来の大腸がんの完全予防が可能になった。

酔まで、自らすべてを開発した「無痛内視鏡」を駆使し、痛みはおろか、患者に恐怖すら感じさせない。先日、4年ぶりに自分で体内に内視鏡を入れ、15個もあったポリープを除去。「看護師さんに証拠写真を撮っておいてもらえばよかった」と笑った。

## がん化のリスクを放置する医療は間違っている

「前がん病変である大腸腫瘍の全切除をすれば、進行大腸がんの発病をほぼ完全に予防できる。それには内視鏡下での手術が必須です」

過去に、ある大手百貨店からの要請で、十数年の間、約1000人の従業員に対し、大腸内視鏡検診を実施。発見した大腸ポリープ全切除を行うと、それまで大腸がんで毎年2名が亡くなっていたの

が、すぐにゼロになった。しかし現在、日本の多くの医師が、「切除すべき大腸ポリープは5mm以上」と線引きし、田淵医師のように全切除を行う医師は少ない。医師の診療時間に限界があり、小さなポリープががん化する可能性は小さいという理由からだ。

## 持病の苦痛が医療技術を磨いた

「それは間違った考えです。隆起型よりも陥凹型のほうが5倍の速さで浸潤します。粘膜下に浸潤する陥凹型大腸がんの平均サイズは7・5mm。

痛みを出さない秘密は  
「長靴下を履く要領で  
腸壁を手前にたぐりよ  
せながら進むこと」



5㎜未満でもリスクは高すぎるのです」

患者の痛みやリスクは一刻も早く取り除きたい。その思いは、学生時代に育まれた。

’58年、岡山県で生まれた。

ごく一般的なサラリーマン家庭で育ったが、医師をめざしたのは「頭が抜群によかったからです」と冗談めかして笑う。高校卒業後、一浪して東京大学理科Ⅲ類に進学。しかし、思いがけない病魔に襲われてしまう。安倍晋三首相もかかった難病、「潰瘍性大腸炎」だ。下痢、粘血便などを繰り返し、「大腸内視鏡検査」も、嫌な思い出として残った。

「その時の苦痛があまりにも衝撃的でした。以来、苦痛のない内視鏡検査の実現が、自分の目標になりました」

卒業後は消化器内科に進み、「内視鏡を抱いて眠る」ほど、操作技術の向上にのめり込む。「痛みのない内視鏡検査」を開発したのは’87年、医師になってわずか3年目だった。

「痛みのない内視鏡検査をする医者がある」との評判は口コミで広まり、内科医として通常の外来診療を終えた後、夜8時過ぎまでひたすら内視

鏡手術をこなした。のちに内視鏡検査と治療に特化したクリニックを設立。評判は、天皇皇后両陛下の耳にまで達した。

## 操作技術を極めて「吉報」が届いた

2002年の年末、「世間には痛みのない内視鏡検査があるようですが、私たちは受けられないのですか」という両陛下のお言葉がはじまりだったという。宮内庁関係者が調査に動き、数名の候補者のひとりとして東大講師の田淵医師の名前もあがった。

「この上ない幸運であり、名誉なことだ、と感じました」  
年が明けた03年2月、担当医の一人に選ばれた田淵医師は前日までに検査器具の用意を済ませ、身ひとつで皇居に向かった。前夜はぐっすり眠れ、普段通りの検査ができた。昭和天皇の手術に携わった東大の先輩から直接、当時の話を聞いたことがあったからだ。「その先生は手術前夜、寝られなかったそうですが、『自分はいかなりの症例を見てきた。わからないものが出てくるはずがない』と言いつつ聞かせたそ



「痛みのない内視鏡検査があるようですが……」。両陛下のお言葉によって、田淵医師に白羽の矢が立った

## どの患者さんにも陛下を診た時と同じ気持ちで向き合う

うです。私もポリープだけでその時点で約13万個とつていた。知らない病変が出てくるはずがない、という落ち着いた気持ちでした」

ところが、一生に一度あるかないかの大役を終えた直後、携帯電話が鳴り、安堵の気持ちに吹き飛んだ。

「保険医停止処分が決定したという報せでした。理由は保険の不正請求。通院していた患者さんに、薬を2週間分多く投与するため便宜を図ったことが理由でした」

かつて、一回に投与できる薬は14日分までという決まりがあった。ただ、慢性疾患の患者にとつては、毎回同じ薬をもらうのに月2回の通院は負担が大きい。02年の通達の変更によってこの制限は撤廃されたが、田淵医師はこの日、「過去に違法行為を行った」として処分されたのだ。

田淵医師は大腸ポリープや胃がんの原因であるピロリ菌の除去にも積極的だった。たとえばそれが早期除去により、がん発生の確率を抑える目的でも、国からは「不要な手術を重ね、医療費削減政策に歯向かう医者」として目を付け

られていたふしがある。5年間の保険医停止期間が明けた08年3月、5年前と同様の理由で、1ヵ月間の医師免許停止処分を下された。

「みんながやっていることなのに、と思うとがっかりした。でも私は、どの患者さんに対しても陛下を診た時と同じ気持ちで向き合ってきた。自分の行為は患者さんのためだ、という気持ちは失わなかった」

医師免許が復活してからは、診療の傍ら、「がん撲滅の会」を結成。全国で講演会を開催し、「がん予防11か条」を掲げ、国の政策に反映させる活動を精力的に展開している。

「東日本大震災では1万8000人も命が奪われました。大変な数です。しかし、大腸がんをはじめ、消化管がん全体では毎年11万人以上の命が失われている。内視鏡検査をしっかり行い、ピロリ菌を除去すれば、予防できるのに。私はがんで死にゆく人々が、津波にさらわれていく姿に重なって見えて仕方ない」  
予防できるがんで、死なせてはいけない――。強固な信念に支えられ、今日も、がん撲滅のために闘い続ける。



▲ 将棋は五段の腕前（手前）。東大では将棋部に所属し、主将も務めた上に、全国大会優勝も果たした



岡山の大先輩、名人・大山康晴氏からもらった将棋盤。「あまりにも緊張して声をかけられませんでした」



▲ 結婚前の田淵医師25歳。妻・百合さん（右）と祖母・鍋島政子さん（左）と記念撮影。鍋島家の別荘にて

▲ 中学3年の時には「山陽放送創立20周年記念事業〈岡山県下中学生アメリカ派遣〉」のメンバーに選抜された



予防できるがんで  
もう誰一人  
死なせたくない

たぶち・まさふみ  
1958年、岡山県出身。  
84年に東京大学医学部  
医学科を卒業。91年5  
月、東京共済病院内科  
に勤務しながら、中目  
黒消化器クリニックを  
開設。97年から東京大  
学医科学研究所の講師  
を兼任。'03年に天皇皇  
后両陛下の大腸内視鏡  
検査を担当した

取材・文／木原洋美  
撮影／岡田康且

